

わたしと教科書

宮城県 宮城県仙台二華中学校 1年
井崎 英里

ピカピカのランドセルを背負い、少し袖の長い制服と歩くたびにかかとの浮く上靴を履き、初めて教室へ入ったあの日。大きな窓から入る光に包まれた教室は、黒板も机も全てがキラキラと輝いて見えた。六年生のお姉さんが、窓際から三列目の一番前の席まで私を連れて行ってくれたことを覚えている。

初めての学校生活は、発見と出会いの毎日だった。何をしても何を見ても、嬉しくて楽しくて、明日という日が毎日とても楽しみだった。

小学校一年生の記憶は、とても断片的なものばかりで、写真のような一場面となるものが多い。年齢を重ねるごとに、記憶される内容や時間は多く濃くなるものの、その時の気持ちの部分は少なく薄くなっている気がしてならない。記憶とは不思議なもので、突然思い出したり、ある場面になると思い出したり何かの刺激で思い出すものもある。もちろん忘れてしまっているものも多い。そんな小学校一年生の記憶の中に、毎年新しい教科書をいただく時に思い出すものがある。

入学式の翌日か翌々日だったと思う。先生のお手伝いのために行った場所は、図書室だった。図書室の大きなテーブルの上には、たくさんの本が積み重ねられていた。本といっても、書棚に並ぶ本よりも大きくて薄く、まだ小さかった私には、大きな本の山に見えた。

誰から伝えられたわけでもないのに、そのうちの一冊は、自分の手元にくるものだと直感で知っていた。そして、どのようにしてこれらの本を教室まで運んだのかということとは、どうしても思い出すことができない。次の場面は、教室で先生が先ほどの本を配っており、私が初めて教科書を手にした瞬間となる。ツルツルしていて、開くとパリパリしている教科書。本とは違ったにおい、教科書独特のにおいだ。私はこのにおいがとても好きだ。小学校一年生の私は、初めての教科書がとても嬉しかった。クリスマスのサンタクロースからのプレゼントのように嬉しく、大切にしようと思った。この教科書で一生懸命勉強しようと思っていた。

毎年、教科書を手にすると思い出す一場面である。そしてそれは、新しい学年の始まりを知らせ、今年も頑張ろうという気持ちにしてくれる大切な思い出だ。

教科書の思い出は他にもたくさんある。小学校一年生の時の宿題で、国語の作品「さらだでげんき」のサラダを作らしようというものがあった。サラダのドレッシングに、ネコさんになったつもりでかつお節を入れた。スイミーの話では、私がスイミーになっていた。算数で習った数字がとても不思議な文字に見えて仕方なかった。社会では、教科書を通して時を超え、様々な国や文化に触れた。理科で虫メガネと太陽で紙が燃えることにとっても驚いた。家庭科や音楽、図工も教科書の様々なページが私の心に残っている。日本以外の国で使っている言葉や文字を見た時には、今までにない衝撃を受けた。実際にその言葉を聞いた時の驚きと感動は今でも忘れられない。私も他の国の言葉の話

せるようになりたいと心から思った。教科書とは、発見する喜びと感動、新しい知識を私に伝えてくれた大切な存在である。

みんなと同じ本なのに、ネームペンで「いざきえり」と書いた瞬間から私だけのものになる教科書。この教科書が、子どもの未来を考えて作られ、無償でいただいていることを知ったのは、小学校高学年になってからだったと思う。それまでは、校長先生からの贈り物だと思っていた。私たちのために作られ、いただいていると知った時、教科書をいただく時の嬉しい気持ちとは少し違った思いが私の中に広がった。

中学に入学をし、教科書とは違う副教材という名のテキストが配られた。これまた不思議な存在である。教科書以上に活躍する教科もある。教科書と一緒にカバーを付け、毎日私のカバンに納められている。言うならば、教科の友達、いやライバルだろうか。

今日も私のカバンは、十キロほどの重さになりパンパンだ。一日七時間授業。仕方のないことだが、もう少し軽くならないだろうかと思ってしまう。しかし、カバンに並ぶ教科書を見ると、あの日、小学校一年生の時の自分を思い出し、頑張ろうという気持ちになる。

これから先、教科書はどのような形に変化するのだろうか。もしタブレットのような形になってしまったら、どんなにカバンが軽くなることだろう。それでも、あの教科書にしかないツルツル感やパリパリ感、においがなくなってしまうなら、やはり教科書は教科書の姿であってほしいと私は思う。

大人の思いも詰まった教科書とは、やはり重いものなのだろう。その思いを胸に、今日もまた、重いカバンを背負って登校しよう。